

第二言語としての日本語格助詞の習得過程解明をめざして — ブラジル人幼児の事例における予備的調査 —

久野 美津子

【要旨】

本稿の目的は、ブラジル人幼児1名の格助詞の出現時期と回数を調査することによって、格助詞の習得過程を明らかにするための予備的調査をすることである。縦断的調査から得られた発話資料を分析した結果、(1)「が」「に」「で」「を」「と」「の」「へ」「から」の格助詞において、正用が初出する以前に、格助詞を使用しない段階が観察された。(2)格助詞の初出時期には違いが見られ、特に6～8ヶ月目に初出した「が」「に」「で」「を」「の」「と」と13～17ヶ月目に初出した「まで」「から」「へ」とでは大きな差があった。(3)「に」の初出時期は特に早いとはいいがたいが、その使用回数は初出直後から多かった。これは、ほぼ同時期に初出した「が」「で」「を」「の」「と」には見られない特徴であった。(4)「が」「に」「で」「を」「と」「の」「から」は、正用として多く使用され始めるようになると、誤りとしても使用されるようになった。

【キーワード】

第二言語習得、格助詞、ブラジル人幼児、代用の誤り、初出時期

1. はじめに

日本語には様々な格助詞があり、どのような種類、数の格助詞、及び格が文の構成にとって必要であるかは、用言によって予め決まっている(小川他1982)。そして、母語(L1)あるいは第二言語(L2)として日本語を学ぶ学習者にとって、この格助詞は非常に困難な項目であることも知られている(野田他2001)。これまでの格助詞に関する習得研究では、L1の場合、縦断的調査が多くなされ、その習得過程において誤用も観察されている(永野1959、横山1989a、1989b、1991、Clancy1986)。またL2の場合も、1990年代以降、格助詞の習得研究が盛んに行われるようになり、学習者に見られる数多くの誤用も報告されている(迫田1990、2001、石田1991、松田・斎藤1992、Yagi1992、白畑1993a、久保田1994、井内1995、八木1996、今井2001)。

久野(2002、2003)では、ブラジル人幼児2名を縦断的に観察し、発話資料を基に、場所を表す格助詞「に」「で」の習得過程について報告した。ここでは、いくつかの特徴を見出すことができた。しかし、分析対象とした格助詞が「に」「で」だけであったこと、さらに、「に」については「存在場所」のみを対象としていたことから、格助詞の全体的な使用状況や習得過程の特徴を把握することができなかった。そこで本稿では、久野(2002、2003)では明らかにできなかった、「に」「で」を含む様々な格助詞について、その使用状況を把握し、L2としての格助詞の習得過程の解明を目指すための予備的調査を行った。

2. 先行研究概観

まず、L1の先行研究について簡単に触れる。L1幼児の場合、助詞の種類や対象児によって時期に違いはあるものの、主な助詞は3歳頃までに初出することから、3歳頃までに助詞が正しく使えるようになると考えられていた(永野 1959、大久保 1967、Miyahara 1974)。しかし、横山(1989a)は、助詞の習得に関して、正用だけでなく誤用の実態も踏まえるべきだと考え、幼児1名の10ヶ月から3歳3ヶ月までの自発的発話資料を分析した。その結果、助詞の習得過程には、まず「全く助詞が使えない段階」、次に「限られた発話の中で助詞を正しく使うことのできる段階」、次に「正用だけでなく、しきりと誤用も行う段階」、最後に「全ての助詞が正しく使える段階」があることを述べている。

次に、L2の先行研究について述べる。L2としての日本語の格助詞に関しては、これまで横断的あるいは縦断的調査によって様々な研究がされてきた。縦断的調査のうち、発話資料を分析したものも幾つかある(石田 1991、松田・斎藤 1992、白畑 1993a、1993b、久保田 1994、井内 1995、西谷 1997、奥野 2001、松本 1998、2000、久野 2002、2003)。研究の対象者に関しては、日本語教育機関等で学ぶ成人学習者を対象としたものは多いが、幼児や児童を対象とした研究はあまり多くはない(白畑 1993a、西谷 1997、1998、松本 1998、2000、久野 2002、2003)。白畑(1993a)は、韓国人幼児が連体修飾構造を習得していく過程を11ヶ月間観察し、本来「の」を必要とする箇所でも「の」を生成するようになった被験者が、必要ではない箇所でも「の」を過剰に生成するようになったことを述べている。西谷(1997、1998)は、中国人及びブラジル人児童4名を4～11ヶ月間観察し、格助詞を含む助詞の使用に関しては、月数が増すにつれて助詞の種類や数が増加していき、反対に、誤用が減っていくという報告をしている。松本(1998)は、中国人児童の来日後約11ヶ月間の助詞の出現時期、頻度などを調査した。その結果、格助詞に関しては、かなり誤用が多く、第1期(2～27週)には「に」と場所を表す「で」との混同、第2期(30～40週)には「最初の名詞+に」で主語を表す傾向、および「の」の過剰使用、第3期(42～49週)には「を」「が」と「で」「と」との混同が見られたことを述べている。さらに松本(1998)は、「へ」の出現が無く、「を」「へ」の習得が遅かったとも述べている。

久野(2002、2003)では、ブラジル人幼児2名の発話資料を基に、「ある、いる」などの述語を伴い存在場所を表す「に」、動作場所を表す「で」について、その使用状況を報告した。そこで得られた特徴の幾つかを(1)に挙げる。

- (1) a. 観察最初期には、助詞を使用しない段階があった。
- b. 正用「に」の初出時期は正用「で」の初出時期よりも早かった。
- c. 動作場所を「に」で代用している誤りが多く、場所表現には「に」を使うという学習方略を取っている可能性が伺えた。その理由として、「に」が存在場所以外の場所表現、あるいは場所以外の用法としても広く使用されていることが考えられる。
- d. 「で」「に」は、正用として多く使用されるようになると、本来使用すべきではない箇所でも代用としても使用されるようになった。

以上の結果を踏まえ、本稿では「に」「で」を含む全ての格助詞について、以下(2)に挙げる問題点を明らかにしたい。

- (2) a. 各格助詞の習得過程の最初期において、助詞を使用しない段階が見られるか。
 b. 各格助詞の正用の初出時期に違いが見られるか。
 c. 「存在場所」だけでなく多様な用法を含めた「に」の初出時期は早いのか、また使用回数は多いのか。
 d. 格助詞は正用として使用されるようになると、他の助詞を使用すべき箇所でも代用としても使用されるようになるのか。

発話資料の分析にあたっては、発話の状況や文脈を考慮し、正用か否かを慎重に判断しなければならない。義務的生起文脈 (Obligatory Contexts, OC) において、助詞が発話されていない場合(「 ϕ 」)、その発話データを分析の対象から外している先行研究もある(奥野 2001、松本 1998、2000)。しかし、「 ϕ 」を誤りの一つであると捉えている研究も多い(迫田 1990、石田 1991、松田・斎藤 1992、久保田 1994)。また、「 ϕ 」を発達段階の一部として視野に入れているものもある(Slobin 1973、横山 1989a、白畑 1993b、2001)。縦断的研究によって、ある格助詞がどのような経緯を辿って習得されていくのかを調査する場合、正用はもちろん、「 ϕ 」を含めた誤りも視野に入れ分析する必要があると思われる。「 ϕ 」には、省略すると不自然である場合と、省略しても不自然ではない場合がある⁽¹⁾。従って、もし対象児が格助詞を省略した場合、使用すべき格助詞を理解した上での省略なのか否かは定かではない。しかし、省略すると不自然である格助詞の場合に限ってみても、OCにおける「 ϕ 」の初出時期やその後の出現状況などに関して、L2 幼児を習得段階の最初期から長期間に渡って観察した研究は、筆者の知る限り白畑 (1993a) を除いてほとんど見当たらない。このことから、本稿では、会話において省略可能な格助詞も「 ϕ 」に含め、その使用状況を調査することにする。

3. 方法

3.1 対象児

ポルトガル語をL1とする、ブラジル人女児(Y)を対象とした。Yは1996年9月13日にブラジルで生まれ、1997年9月6日に来日した。2000年4月2日に静岡県掛川市内の保育園に入園した。入園時の年齢は、3歳6ヶ月であった。Yの両親は日本語がほとんど話せないため、親子間の会話はポルトガル語で行われていた。そのため、入園時には、日本語は全く話せなかった。

3.2 観察期間

対象児Yが保育園に入園した直後の2000年4月20日から、Yが両親と共に帰国する直前の2001年12月25日まで観察を行った。その内、本稿では、入園直後から2001年9月までの最初の18ヶ月間に得られた資料を分析対象とした。これは、Yが3歳6ヶ月から5歳0ヶ月までの期間である。

3.3 観察方法

筆者が、原則として1週間に1度保育園を訪問し、観察を行った。1回につき約60分間、発話や状況等を記録した。同時に発話は全てテープに録音し、後に文字化した。分析資料

は主に対象児の自主的発話である。観察者が意図的に誘導的質問をする場合もあった。

3. 4 調査項目と分析方法

本稿で調査対象とした格助詞は「が」「を」「に」「へ」「と」「で」「から」「より」「まで」「の」の10種類である。これらの格助詞の基本的用法は表2の通りである(小川他 1982、益岡・田窪 1987)⁽²⁾。

表1 格助詞の基本的用法

格助詞	基本的用法	用例
「が」	(a) 動作・変化・状態の主体	先生が 来た。
	(b) 状態述語の対象	私は 寿司が 好きだ。
「を」	(a) 動作・作用の対象	手を 洗う。
	(b) 移動の経路・動作の場所	廊下を 歩く。
	(c) 期間	時間を 過ごす。
	(d) 起点	小学校を 卒業する。
「に」	(a) 存在位置	あそこに 車がある。
	(b) 所有者	わたしには 車がある。
	(c) 動作・事態の時、順序	誕生日に プレゼントを もらった。
	(d) 動作主	先生に 叱られる。
	(e) 着点	ここに 荷物を 置く。
	(f) 変化結果	秋に なる。
	(g) 授受などを行う相手	母に 花を あげる。
	(h) 対象	学校に 遅れる。
	(i) 動作の目的	買い物に 行く。
	(j) 原因	寒さに 震える。
「へ」	方向・目的地	学校へ 行く。
「と」	(a) 共同動作の相手・一緒に動作する者	友達と 遊ぶ。
	(b) 比較の基準	私の年齢は 彼と 同じだ。
	(c) 変化結果	無駄と なる。
「で」	(a) 動作・出来事が行われる場所	公園で 遊ぶ。
	(b) 手段・道具	電車で 行く。
	(c) 原因	風邪で 休む。
	(d) 材料	紙で 作る。
	(e) 範囲・限度	1時間で 終わる。
	(f) 様態	片足で 歩く。
	(g) 動作主	私達で やっておく。
「から」	(a) 起点	階段から 落ちる。
	(b) 物などを受け取る相手	図書館から 本を 借りる。
	(c) 原因・理由・判断の根拠	別の視点から 考える。

格助詞	基本的用法	用例
	(d) 原料	小麦粉から パンを 作る。
	(e) 動作や状態の始まる時	明日から 出張だ。
「より」	(a) 比較の基準	昨日より 寒い。
	(b) 場所・時間の起点	3時より 始める。
「まで」	動作・作用・事態等の及ぶ先、行きつく先	東京まで 行く。
「の」	(a) 所属先の指定	父の 帽子
	(b) 性質の指定	木の 机
	(c) 数量指定	3人の 友達
	(d) 主体の指定	先生の 笑い声
	(e) 対象の指定	ひらがなの 勉強
	(f) 所の指定	壁の 絵
	(g) 時の指定	誕生日の 夜

本稿では、OCにおける格助詞の出現時期と回数を調べた⁽³⁾。対象児の意図するところが曖昧な発話は、調査の対象外とした⁽⁴⁾。分析対象とした格助詞には、本来使用すべき格助詞を使用せず、他の助詞で代用しているもの、必要な箇所に格助詞を何も使用していないもの(「 ϕ 」)、本来格助詞を必要としない箇所で過剰に使用しているものも含まれる。対象児はこれらの用法を誤りではなく正しいという認識のもとで使用していた可能性もある。格助詞には省略可能な場合や、「へ」と「に」などのようにほとんど区別なく使用される場合もある(益岡・田窪 1987、長谷川 1993、野田他 2001)。従って、省略可能な格助詞における「 ϕ 」や、「へ」の代わりに「に」を使用したものなどについては決して誤りとは言えないが、本稿では便宜上これらも誤りとして扱った。「 ϕ 」に関して、(3)の発話例のように「 ϕ 」が複数回繰り返されている場合、「 ϕ 」は1回とみなした。また、便宜上、1ヶ月を1つの単位として習得過程を捉えることにした。表記に関して、(*)が付してあるものは当該項目において格助詞の使用が不適格であることを表す⁽⁵⁾。

(3) *おみず (が) ある おみず。

(13ヶ月目)

4. 結果と考察

観察結果は表2のとおりである。表中の例えば「*がを→が」とは、(4)のように「がを」を使用しているが、本来使用すべき格助詞は「が」であることを表す。また「*に→ ϕ 」とは、(5)のように「に」を使用しているが、本来格助詞を必要としない誤りを表す。

(4) 〈針刺しの練習をしながら〉 *…こうやって こうやって これがを (→が) これ
ができたなら、はりが、んとね、かわいいっしょ。 (14ヶ月目)

(5) *ママ 大きいに (→ ϕ) なったらね… (15ヶ月目)

調査対象とした格助詞のうち、「より」は1度も観察されなかった。以下では、「より」を除く9種類の格助詞の観察結果について、(2a)～(2d)で挙げた問題点に沿って見ていく。

表2 格助詞の使用状況

「が」

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ		1	1		1	16	13	42	60	104	67	102	46	97	88	47	90	67
正用						1		5		22	27	24	8	55	18	24	34	69
*に→が								4	1	2	1	3	2	5	1		1	1
*と→が								1	2	1								
*で→が												5						
*を→が														1				
*は→が																	1	1
*ん→が											1	1						1
*がを→が														1				
*が→φ										2								

「に」

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
*φ					4	12	13	9	7	21	19	19	17	21	18	15	26	32	
正用							34	91	25	73	33	39	35	90	76	35	62	128	
*で→に							5			1		22	2	2	1	3	1	3	
*が→に										3		1					1	1	
*の→に											1	1							
*を→に													1		1				
*へ→に							2										1	1	
*から→に																		1	1
*は→に										1									
*にへ→に							5												
*にを→に														4					
*にに→に											1	1						1	
*に→φ												2			2			1	

「で」

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ						2	1		3	4		2		9	4		1	9
正用							10	3	1	3	6	24	2	15	12	14	13	37
*に→で							3	6	1	7	3	4	1	15	3	1	2	4
*と→で												1						
*でで→で							1											

「を」

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
*φ					6	9	34	60	67	71	75	102	38	114	110	66	83	164	
正用							1						2	32	2	1	3	6	
*に→を								3		2			2	3	2			2	2
*で→を									1	2		5	1	2					
*が→を											3	4	3		1			1	3
*と→を										1									
*は→を								1											
*ん→を																			1

「の」

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
*φ							1	5	2		1	2			2	2	2	7	
正用							1	3	9	13	12	39	26	69	42	34	72	169	
*が→の																		1	
*ん→の											1	2							4
*の→φ												1	1	3	9			1	2

「と」

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ						2	1		1		1	1						
正用								6	10	5	3	2	1	3	1	7	10	11
*にと→と											1							
*と→φ												2						

「へ」

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ						2	2	4	6	7	3	3	3	7	8	5	22	36
正用																	1	1
*に→へ								2	2	3		1	4	19	4	3	5	17
*で→へ															1	1	3	3
*には→へ								1										

「から」

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ									1									
正用														6	6	8	7	8
*に→から								2		2								1
*で→から																		1

「まで」

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
正用													1			1	3	7

4. 1 「φ」の初出時期と正用の初出時期

「まで」に関しては、「φ」は1度も観察されなかった。「まで」以外の格助詞に関しては「φ」が観察され、いずれの場合も「φ」の初出時期の方が正用の初出時期より早かった。このうち、「から」については「φ」の初出以前に代用の誤りが初出しているが、「が」「に」「で」「を」「の」「と」「へ」においては、まず格助詞を全く使用しない段階が観察され、続いて格助詞を正しく使用する段階が観察されたのである。各格助詞の「φ」の初出時期と正用の初出時期は表3の通りである。表中の数字は、入園後何ヶ月目であることを示す。「の」の場合、「φ」も正用も初出時期は同月ではあったが、「φ」の方が一週間先行していた。

表3 「φ」と正用の初出時期

格助詞	が	に	で	を	の	と	へ	から	まで
「φ」初出時期	2	5	6	5	7	6	6	9	—
正用 初出時期	6	7	7	7	7	8	17	14	13

「φ」の初出時期を見ると、「が」が最も早く2ヶ月目であり、他の格助詞は5ヶ月目以降に徐々に初出していた。「φ」の初出後、正用が初出するが、「が」「に」「で」「を」「の」「と」の初出時期が6～8ヶ月目であったのに対し、「へ」「から」「まで」の初出時期は13ヶ月目～17ヶ月目であった。(6)～(13)は、正用が初出する以前に「φ」が観察された発話例である。

- (6) 〈痛い箇所を指しながら〉*ここ(が) いたい。 (2ヶ月目)
- (7) 〈探していた靴を見つけて〉*あった ここ(に)。 (6ヶ月目)
- (8) 〈観察者に対して〉*まってて ここ(で)、まってて ここ(で)。 (6ヶ月目)
- (9) 〈靴を脱がせるよう頼む〉*やって やって これ(を) やって。 (5ヶ月目)
- (10) 〈先生に尋ねながら〉*おかばん どこ ヤンくん(の)。 (7ヶ月目)
- (11) 〈ユキの絵と同じ絵を描くよう頼む〉*やって ユキちゃん(と) いっしょ。
 〈観察者が絵を描くと〉*ユキちゃん(と) いっしょちがう。 (6ヶ月目)
- (12) *コマツせんせい こっち(へ) いった。 (6ヶ月目)

(13) 〈塗絵を持ってきた友達に〉*どこ(から)もってきた それ? (9ヶ月目)

「 ϕ 」の初出時期と正用の初出時期との差は格助詞によって異なっていたが、特に「へ」については正用の初出時期が遅く、その差が大きかった。その理由として、日常会話では「へ」は省略される場合が多いこと、また「へ」は人や物が動いていく方向を示すが、目的地を示す「に」とほとんど区別なく使用されることなどが考えられる(益岡・田窪 1987、長谷川 1993)。(14)～(16)は7ヶ月目の同日に観察された発話例である。

(14) 〈先生に椅子に座るよう頼んでいる〉*せんせい ここ(に)やって ここ(に)やって。せんせい せんせい ここへ(→に)やって ここ(に)。(7ヶ月目)

(15) 〈観察者にボールを袋に入れるよう頼む〉ここに やって。(7ヶ月目)

(16) 〈手に付けた石鹸を壁にこすり付けながら〉*ここにへ(→に)。(7ヶ月目)

(14)～(16)の「座る」「入れる」「こすり付ける」という動作は、いずれも多少移動の動きが伴っている点で共通している。これらの発話が観察された時点では、Yは「へ」「に」「 ϕ 」のどれを使用したらいいか曖昧な状態であったと思われる。しかし、「に」と「へ」をほぼ同義として捉えている様子が伺える。8ヶ月目以降になると、Yは「へ」を「に」で代用させることが多くなった。このことから、Yが目的地・方向を表す場合は「に」を使用すればよいと認識した可能性、あるいは「へ」は省略できると認識した可能性が推測される。このような理由から、「へ」の正用の初出時期が遅れたと考えられる。

「から」「まで」については、L1幼児の場合も、初出時期が比較的遅かったり使用頻度が低かったりするという報告がある(永野 1959、大久保 1967、山田 1980、江端 1995－1996)。これらの格助詞の初出時期が遅れる要因には、その意味用法も関わっていると考えられる。「から」の場合、「で」で表せる用法(「小麦粉からできている」)、「が」で表せる用法(「私から主任に言います」)などもある(小川他 1982、仁田 1993)。また、「まで」の場合、その多くは「に」「へ」で言い換えが可能である(仁田 1993)。このことから、Yは「から」「まで」を使用すべき状況でも「に」「へ」「で」等によってそれらを表現していた可能性も考えられる。(17)はYが「から」を使用すべき箇所ですら「に」を代用している発話例である。

(17) 〈落ちていた帽子を拾い観察者の所へ持ってきた時〉*ぼくの、あそこに(→から)もってきた、あそこに(→から)もってきた、これ。(8ヶ月目)

Yが幼児である点、また意味用法の複雑さなどを考えると、Yにとって「から」「まで」は、認知的あるいは概念的に捉えにくい格助詞であったことが予想される。

4. 2 「に」の初出時期と使用回数

「に」の正用の初出時期は7ヶ月目であった。これは、13～17ヶ月目に初出した「へ」「から」「まで」とは6ヶ月間以上の差があるものの、6～8ヶ月目に初出した「で」「を」「の」「と」とはそれほど差があるとは言えない。このことから、「に」の初出時期だけが特に早かったとは言いがたい。一方、「に」の正用の使用回数を見てみると、7ヶ月目の初出以来、他の格助詞に比べ非常に多く、しかも毎月継続的に使用されていた。他の格助詞のうち「が」「の」についても、正用の回数は比較的多かった。しかし、「に」は初出した月を含め、その後ほぼ毎月30回以上使用されていたのに対し、「が」「の」は初出以降数ヶ

月間、それほど多くは使用されていなかった。「が」の場合、正用は6ヶ月目に1回、8ヶ月目に5回であり、7、9ヶ月目には模倣発話が1回あっただけで、自発的発話は観察されなかった。その後10ヶ月目以降になって20回以上使用される月が多くなった。「の」の正用の場合は、7ヶ月目に1回使用され、その後徐々に増加してはいるが、11ヶ月目まではそれほど多くなく、12ヶ月目以降になってほぼ毎月30回以上使用されるようになった。これらのことから、様々な格助詞の正用が出現し始めた6ヶ月目以降数ヶ月間にわたって、最も多く使用された格助詞は「に」であると言えるだろう。

4. 3 誤りの使用状況

4. 3. 1 「 ϕ 」の誤り

9種類の格助詞のうち、「まで」を除く8種類において誤りが観察された。誤りのうち「 ϕ 」に関しては、「が」「に」「を」「へ」において、期間を通じて多く使用される傾向にあった。これらの格助詞は会話では省略されることもあるため、Yは省略という方法でこれらのOCを表現することが多かったとも考えられる。これに対し、「で」「の」「と」「から」においては、「 ϕ 」の使用回数は観察期間を通じてそれほど多くなかった。このうち「と」「から」については、観察期間の途中で「 ϕ 」が観察されなくなったが、「で」「の」については、観察期間を通じて断続的に「 ϕ 」が観察され続けた。これは、Yが「と」「から」のOCでは何らかの助詞が必要であることを比較的早期に認識できるようになったが、「で」「の」のOCではまだそれを完全に認識するには至らなかったためだと推測される。

4. 3. 2 代用の誤りの使用時期

代用の誤りが観察された時期については、2つの特徴が見られた。まず1つ目の特徴は、ほとんどの格助詞において、正用の初出以降に代用が初出していた点である。2つ目の特徴は、期間を通じて「 ϕ 」が観察されている間は代用も観察されたが、「 ϕ 」が観察されなくなると、代用もほとんど観察されなくなったという点である。「と」「から」「まで」の場合、期間中の発話回数も少ないため詳述はできないが、「 ϕ 」が観察されていない時期には代用もほとんど観察されなかった。これに対し、「が」「に」「で」「を」「の」「へ」の場合、期間を通じて「 ϕ 」が継続的あるいは断続的に観察されていた。そして、「 ϕ 」が観察されている限り、代用などの誤りも消滅することはなかった。これら2つの特徴から、YはあるOCをまず「 ϕ 」によって表現し、そこに徐々に適格な格助詞を当てはめていくようにはなったが、「 ϕ 」を使用し続けている間は使用すべき格助詞が何なのか未だ曖昧な状態であったため、代用によってもOCを表現していたのではないかと考えられる。

4. 3. 3 代用の種類と特徴

代用として使用された助詞は、「が」「に」「で」「を」「の」「と」「へ」「から」「は」「ん」、あるいはこれらを重複させたものであった。このうち、格助詞に関しては、これらが代用として誤って使用される以前あるいは同時期に、既に正用としても使用されていたものがほとんどであった。表4は、各格助詞の正用の回数、および、その格助詞が誤りとしても使用されている回数を月別に記したものである⁽⁶⁾。

表4 格助詞の正用回数と誤りの使用回数

「に」

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
正用回数							34	91	25	73	33	39	35	90	76	35	62	128
*に→が								4	1	2	1	3	2	5	1		1	1
*に→で							3	6	1	7	3	4	1	15	3	1	2	4
*に→を								3		2			2	3	2		2	2
*に→へ								2	2	3		1	4	19	4	3	5	17
*には→へ								1										
*に→から								2		2								1
*にと→と											1							
*にに→に											1	1						1
*に→φ												2			2			1

「で」

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
正用回数							10	3	1	3	6	24	2	15	12	14	13	37
*で→が												5						
*で→に							5			1		22	2	2	1	3	1	3
*で→を									1	2		5	1	2				
*で→へ															1	1	3	3
*で→から																		1
*で→で								1										

「と」

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
正用回数								6	10	5	3	2	1	3	1	7	10	11
*と→が								1	2	1								
*と→で												1						
*と→を										1								
*と→φ												2						

「が」

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
正用回数						1		5		22	27	24	8	55	18	24	34	69
*が→に										3		1					1	1
*が→を										3	4	3		1			1	3
*が→の																		1
*が→φ										2								

「の」

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
正用回数							1	3	9	13	12	39	26	69	42	34	72	169
*の→に											1	1						
*の→φ												1	1	3	9		1	2

「を」

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
正用回数							1						2	32	2	1	3	6
*を→が														1				
*がを→が														1				
*を→に													1		1			
*にを→に														1				

「から」

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
正用回数														6	6	8	7	8
*から→に																	1	1

「へ」

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
正用回数																		1	1
*へ→に							2									1	1		
*にへ→に							5												

まず、「に」「で」「と」については、正用が初出した月に代用としても使用され始めた。そして、この時期は「に」「で」「と」の正用回数も多く、正用が毎月継続的に使用され始めた時期でもあった。次に、「が」「の」「を」「から」については、正用が初出した直後ではなく、その数ヶ月後から代用としても使用され始めた。それは、正用が毎月継続的に使用され始めたか、あるいは使用回数が多くなった時期でもあった。このことから、格助詞は本来使用されるべき OC で正用として多用されるようになると、本来使用されるべきではない OC においても代用などの誤りとして使用されるようになると考えられる。「まで」が代用として1度も使用されなかったのは、「まで」が正用として十分使用されていなかったためだと考えられる。(18)～(19)は、代用による発話例である。(18)は「を」を「に」で代用した発話例、(19)は「に」を「が」で代用した発話例である。

(18) 〈紙袋の中の菓子をみせながら〉*これに(→を)みせてあげる? (8ヶ月目)

(19) 〈鞆を置く場所を探しながら)ここに おく。ここじゃなくて、おかばんと、ここ。*ここが(→に)おいといてくる、よいしょ。(10ヶ月目)

代用として使用された格助詞のうち、観察期間を通じて最も使用回数が多かったのは「に」

であった。これは、「に」が正用として、7ヶ月目の初出直後から非常に多く使用された格助詞であったためだと考えられる。また、「に」は「が」「で」「を」「へ」「から」「と」の格助詞の代用として広範囲に用いられていた。これは「に」の意味用法が多岐に渡っていることと関連があるかもしれないが、詳細な分析については、今後の課題としたい。

5. おわりに

本稿の解決すべき課題として取り上げた(2a)～(2d)について、結果と考察から得られた結論は(20a)～(20d)の通りである。ここでは、観察されなかった「より」を除く「が」「に」「で」「を」「と」「の」「へ」「から」「まで」の9種類の格助詞について述べる。

- (20) a. 「が」「に」「で」「を」「と」「の」「へ」「から」の習得過程の最初期において、正用が使用され始める以前に、まず「 ϕ 」によってOCが表現される段階が観察された。ただし、「から」においては、「 ϕ 」に先行して代用による表現も観察された。
- b. 格助詞の正用の初出時期には違いが見られた。特に、6～8ヶ月目に出現した「が」「に」「で」「を」「の」「と」と、13～17ヶ月目に出現した「まで」「から」「へ」とでは、5ヶ月間以上の差があった。
- c. 正用「に」の初出時期は7ヶ月目であり、特に早いとは言いがたい。しかし、その使用回数は初出直後から多く、しかも初出以降毎月継続的に使用されていた。これは、「に」とほぼ同時期に初出した「が」「で」「を」「の」「と」には見られない特徴であった。
- d. 「が」「に」「で」「を」「と」「の」「から」については、これらが正用として多用されるか、あるいは毎月継続的に使用され始めるようになると、本来使用すべきではない箇所でも、代用等の誤りとして使用されるようになった。このうち、「に」は最も多く代用された格助詞であった。ある格助詞のOCを表現する場合、正用と「 ϕ 」とが混在している時期には、本来使用すべき格助詞がまだ曖昧であるため、既知である格助詞によって代用の誤りが生じやすいと考えられる。

以上が本稿で明らかとなった点であり、ブラジル人幼児がL2としての日本語の格助詞を習得していった過程の特徴である。本稿で得られた結果は、L2幼児1名による事例によるものではあるが、L2学習者の格助詞の習得過程を解明する上で、何らかの示唆を与えるものであると思われる。しかし、本稿では、残された課題もいくつかある。それらは対象児のL1からの影響を考慮しなかった点、格助詞を意味用法別の観点から分析しなかった点、省略が許される格助詞と許されない格助詞とを同時に扱った点などである。省略に関しては、日本人母語話者が会話場面においてどの格助詞をどの程度省略しているのかについても調査する必要があると思われる。今後、発話資料をより詳しく分析し、事例研究を重ねることによって、格助詞の習得過程のさらなる解明を目指したい。

注

- (1)省略されることのある助詞とは「が」「を」「に」「へ」「は」である(益岡・田窪 1987、長谷川 1993、野田他 2001)。
- (2)発話資料の分析にあたり、岩立(1979)、野田(1985)、寺村(1982、1991)、丹羽(1990)、庵他(2000)、原沢(2002)なども参考にした。
- (3)複数の用法を持つ格助詞であっても、それらを区別せず1つの格助詞として扱った。
- (4)ある学習項目の習得過程において、ある段階で不可解な発話あるいは誤用が見られるという報告もある(Hawkins 2001)。このことから、発話者の意図が明確でなく分析困難な発話の扱いについても、今後検討が必要な課題であると思われる。
- (5)表記に関して、発話例中の〈 〉内は発話時の状況、()内は筆者が語句等を補ったものである。また、例えば(→で)は、本来使用すべき助詞が「で」であることを意味する。発話例後の()内には発話時期を記した。
- (6)表中の記号等の読み方は表2のものと同様である。

参考文献

- (1)井内麻矢子(1995)「初級日本語学習者による助詞「は」「が」「を」の習得過程」『言語文化と日本語教育』9号 お茶の水女子大学日本言語文化研究会 pp.246-256
- (2)庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- (3)石田敏子(1991)「フランス語話者の日本語習得過程」『日本語教育』75号 pp.64-77
- (4)今井洋子(2000)「上級学習者における格助詞「に」「を」の習得—「精神的活動動詞」と共起する名詞の格という観点から—」『日本語教育』105号 pp.51-59
- (5)岩立志津夫(1979)「一日本語児における初期言語獲得」『日本女子大学児童研究所紀要第4号』pp.26-31
- (6)江端義夫(1995-1996)「双生児の方言会話における格助詞の形成過程について」『言語学林1995-1996』三省堂 pp.1039-1053
- (7)大久保愛(1967)『幼児言語の発達』東京堂出版
- (8)小川芳男・林大・他編集(1982)『日本語教育事典』大修館書店
- (9)奥野由紀子(2001)「日本語学習者の『の』の過剰使用の要因に関する一考察—縦断的な発話調査に基づいて—」『広島大学大学院研究科紀要』第二部(文化教育開発関連領域)第50号 pp.187-195
- (10)久保田美子(1994)「第二言語としての日本語の縦断的習得研究—格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について—」『日本語教育』82号 pp.72-85
- (11)迫田久美子(1990)「話しことばの誤用分析研究」『教育学研究紀要』36巻 中国四国教育学会 pp.116-121
- (12)佐治圭三(1991)『日本語の文法の研究』ひつじ書房
- (13)白畑知彦(1993a)「幼児の第2言語としての日本語獲得と『ノ』の過剰生成—韓国人幼児の縦断的研究—」『日本語教育』81号 pp.104-115
- (14)白畑知彦(1993b)「連体修飾構造獲得過程における化石化現象」『平成5年度日本語教育

学会春季大会予稿集』 pp.55-59

- (15)白畑知彦(2001)「普通文法の視点」『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社 pp.120-135
- (16)白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則(1999)『英語教育用語辞典』大修館書店
- (17)寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- (18)寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- (19)永野賢(1959)「幼児の言語発達について—主として助詞の習得過程を中心に—」『ことばの研究』国立国語研究所 pp.383-396
- (20)西谷まり(1997)『小学校における外国人子女に対する日本語教育の実態に関する研究：外国人子女の日本語習得と教室適応』平成9年3月文部省科学研究費奨励研究(A)課題番号 98780211
- (21)西谷まり(1998)「外国人児童の日本語習得段階と日本人児童との対人関係」『一橋大学留学生センター紀要創刊号』 pp.67-82
- (22)仁田義雄(1993)『日本語の格をめぐる』くろしお出版
- (23)丹羽哲也(1990)「無助詞格の機能—主題と格と語順—」『国語国文』vol.58 第10号 中央図書出版 pp.38-57
- (24)野田尚史(1985)『セルフ・マスターシリーズ1 はとが』くろしお出版
- (25)野田尚志・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子(2001)『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- (26)長谷川ユリ(1993)「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80号 pp.158-168
- (27)原沢伊都夫(2002)「理論と実践の結びつき—テアルの表現形式から—」『静岡大学留学生センター紀要』第1号 pp.23-37
- (28)久野美津子(2002)『ブラジル人幼児2名による日本語の格助詞「に」と「で」の習得過程研究』静岡大学大学院教育学研究科修士論文
- (29)久野美津子(2003)「ブラジル人幼児の場所表現「に」と「で」の習得過程」『日本語教育』117号 pp.83-92
- (30)福間康子(1996)「作文から見た初級学習者の格助詞「に」の誤用」『九州大学留学生センター紀要』第8号 pp.61-74
- (31)益岡隆志・田窪行則(1987)『セルフ・マスターシリーズ3 格助詞』くろしお出版
- (32)松田由美子・斎藤俊一(1992)「第2言語としての日本語学習に関する縦断的事例研究」『世界の日本語教育』第2号 pp.129-156
- (33)松本恭子(1998)「ある中国人児童の助詞の使用実態：1年間のケーススタディーを通して」『ジャーナルCAJLE』第2号 カナダ日本語教育振興会 pp.24-38
- (34)松本恭子(2000)「ある中国人児童の来日2年間の助詞機能の使用状況—発話資料と作文資料の縦断調査報告—」『日本語教育論集』16号 国立国語研究所 pp.1-22
- (35)八木公子(1996)「初級学習者の作文にみられる日本語の助詞の正用順序—助詞別、助詞の機能別、機能グループ別に—」『世界の日本語教育』第6号 pp.65-81
- (36)山田あき子(1980)「コミュニケーション達成への言語習得—女児(23ヶ月～28ヶ月)

- の例一」『日本教育心理学会 22 回 総会発表論文集』 pp.280 –281
- (37)横山正幸 (1989a) 「幼児による助詞の誤用の出現時期と類型」『福岡教育大学紀要』第 38 号 第 4 分冊 pp.225–236
- (38)横山正幸 (1989b) 「幼児による格助詞ニの誤用について」『日本心理学会第 53 回大会発表論文集』 pp.801
- (39)横山正幸 (1991) 「幼児による格助詞ニ→ガの置換誤用」『福岡教育大学紀要』第 40 号 第 4 分冊 pp.303–312
- (40) Clancy, P. M. (1985) “The acquisition of Japanese.” In D. I. Slobin (Ed.), *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition, Vol. 1*. Hillsdale, Lawrence Erlbaum Associates. pp.373–524
- (41) Hawkins, R. (2001) *Second Language Syntax*, BLACKWELL.
- (42) Miyahara, K. (1974) “The acquisition of Japanese particles.” *Journal of Child Language*, 1. pp.283–286
- (43) Slobin, D. I. (1973) “Cognitive Prerequisites for the Development of Grammar.” In C. A. Ferguson and D. I. Slobin (Eds.), *Studies of Child Language Development*, HOLT, RINEHART AND WINSTON. pp.175–208
- (44) Yagi, K. (1992) “The Accuracy Order of Japanese Particles.”『世界の日本語教育』第 2 号 pp.15–25

The Process of Acquiring Case Markers as a Second Language
— A preliminary Investigation of a Young Brazilian Child's Case —

HISANO, Mitsuko

The purpose of this paper is to investigate the process by which the Brazilian child acquired Japanese grammatical case markers. The results of long term observation of the subject are as follows. (1) Before producing the correct forms of each case marker, a no case marking stage (i.e. zero case marking stage) was found. (2) As for the first production of case markers, the subject produced them at different times during the observation period. *Ga*, *ni*, *de*, *o*, *no* and *to* appeared at 6 ~ 8th months, while *made*, *kara* and *e* appeared during 13 ~ 17th month period. (3) Although the first appearance of the correct form of *ni* was not so early, it came to be frequently used from that time on, compare this to *ga*, *de*, *o*, *no* and *to* which appeared mostly at the same period of time. (4) When the child began to use the correct form of the case markers *ga*, *ni*, *de*, *o* and *to* frequently in the obligatory contexts, she also began to use them inadequately in non-obligatory contexts.